

日本における初期社会主義とトルストイ

——キリスト教社会主義者木下尚江・野上豊治の検討を通して・その2——

上 條 宏 之

は じ め に

私は、表題の問題を明らかにするため、『信州大学人文学部人文科学論集〈人間情報学科編〉』（第33号、1999年2月）に「日本における初期社会主義とトルストイ——キリスト教社会主義者木下尚江・野上豊治の検討を通して・その1——」を発表した。同稿で私は、まず木下尚江のトルストイ論を検討し、平民社のトルストイ論との比較検討をおこなった。ついで、長野県下水内郡外様村顔戸の農村青年野上豊治の木下尚江・トルストイへの傾倒を、野上の読書の跡をたどることによって具体的に明らかにする作業に着手した。

トルストイの日本への影響、トルストイと日本の同時代の人々との交流史は、ア・イ・シフマン著、末包丈夫訳『トルストイと日本』（朝日新聞社、1966年）がトルストイ側の資料で明らかにしている。シフマンの『レフ・トルストイと東洋』のうち、日本・中国との関係部分を翻訳したものである。その「日本とトルストイ」の項は、1. 小西増太郎、2. 横井小楠父子、3. 徳富蘇峰・深井英五、4. 日本の西洋化、5. 「アンナ・カレニナ」の翻訳瀬沼格太郎・尾崎紅葉・小栗風葉、6. 日露戦争(1)、7. 黒岩涙香・片山潜・堺利彦・幸徳秋水・安部磯雄、8. 日露戦争(2)、9. 学生田村の手紙、10. 徳富蘆花、11. 高石真五郎・原田助・その他、12. 二葉亭四迷・昇曙夢・原久一郎・加藤直士の10項目の考察からなる。このうち、トルストイと最初に近づきとなった小西増太郎については、小西増太郎著『トルストイを語る』（桃山書林、1948年）を見ることができたが（西田勝氏の教示による）、同書の小西の自序は「昭和十一年九月十日」付けであり、1936年10月に岩波書店から出版されたときのものであった（註1）。

本稿その1で私は、木下尚江のトルストイ観とともに、日本の農村青年野上豊治のトルストイへの傾倒の事実を、あらたな知見としてつけくわえた。そして、野上の尚江やトルストイへの傾倒が、どのような野上の思想形成の過程でおこなわれたのかを解明するため、日露戦争期以前に野上が購読した書物の読書傾向からたどった。その結果、自由民権運動の敗北後の農村青年の一人である野上が、日清戦後に短歌・俳句への関心から詩人児玉花外の詩との出会いを経て、蘆花徳富健次郎の作品を読み、散文・政治への世界への関心を深めたプロセスが明らかになった（註2）。野上が、「余の理想の人物は露国のトルストイ伯」とのべたのは、日露戦争期の1904年であった。

本稿は、以後の野上の思想形成と社会活動を、彼の読書や長野県内外の初期社会主義者たちとの交流を復元しながら、さらに明らかにしたい。野上のキリスト教とのかかわりと社会主義との関係を重視して、解明したいと考える。

なお、初期社会主義者野上豊治の研究では、松本衛士氏の『長野県初期社会主義運動史』

(弘隆社、1987年)が唯一の先行研究であることは、すでに指摘した。松本氏は、「自分の地域で活動し、他地域とあまり接触をもたず、機関誌紙を東京、大阪などから取りよせるといった社会主義者」の事例と野上を位置づけた。氏が野上の「日記」を中心に解明した論稿を参照しながら、本稿は、主として、野上の読書と彼が受けとったはがき類を解説して、野上の初期社会主義に至る過程とその背景、尚江やトルストイへの傾倒はいかなる思想上、生活上の立場からなされたのかを明らかにし、松本氏と異なる野上の人物像とトルストイとの関係を提示したい。

一 キリスト教・社会主義との出会い

松本衛士氏の前掲著は、下水内郡の社会主義運動がキリスト教の影響をうけていたとして、1902年7月に理想団に加盟した下高井郡木島村の藤沢音吉(聖書研究会)の存在を指摘した。藤沢が『平民新聞』を読み、1906年の宮崎民蔵らの土地復権同志会のオルグにも加盟で応えるキリスト教徒であったことを重視している(p.155)。野上と藤沢の親密な交流があったことは、1905年(明治38)2月の藤沢から野上にあてたはがきや読書からも確認できるが、野上のキリスト教への接近は、藤沢の影響からではなかった。

地域青年たちがキリスト教とかかわりをもったのは、きわめて多発的であったことをまず指摘したい。長野県松本平については、山本飼山、棚橋小虎の事例がある(拙著『変革における民衆』銀河書房、1994年)。野上のキリスト教との出会いには、また独自のものがあつた。

日露戦争以前の20世紀にさしかかる日清戦後期に、野上豊治は向学心をもち、通俗百科全書の鳥谷部春汀編『通俗政治汎論』(博文館、第九編、1898年12月15日発行)、帝国百科全書の高山林太郎著『論理学』(博文館、第十二編、1899年5月26日再版発行)、フェーアバンクス原著・十時弥訳述『社会学』(博文館、第五十編、1900年8月13日再版発行)などを購入して学んだ。これらには「野上南洲」「南洲」とサインがあり、野上が「南洲」を名乗った時期のあったことがわかる。『社会学』の裏表紙には、「明治三十三年十二月十日仕入」「日本社会党员野上豊治」と書かれており、1900年に同書を購入し、1906年(明治39)2月24日創立、1907年2月22日結社禁止までの間に活動した日本社会党へ1906年6月に野上が入党した時期にも、これらの書物を傍らに置いていたことをうかがわせる。

彼はまた旅に関心をもった。1903年(明治36)8月22日に『学生必読 旅行之友』(文光堂、1902年7月9日発行)を購入しており、「人間は労する時は労し、楽しむ時はよく楽しむこそめでたけれ。旅行程に楽しきものはなく又旅行ほど悲しきはなかりきなり。旅行は楽しきものにあらずしてうきものなり。うきものにあらずしてたのしきものなり。冷星生」といった書き込みをしている。熊田宗次郎編『洋行奇談 赤毛布』(文禄堂書店、1900年11月29日発行)、『洋行奇談 新赤毛布』(同前、1902年5月13日発行、「明治三十七年四月十七日求 下水内郡外様村 野上豊治」)なども読んでいる。『赤毛布』には、「明治三十六年二月二日仕入、クリスチャン アーメン 草乃戸千浪生」、『新赤毛布』には「笑楓庵冷星 小トルストイ」と、それぞれ裏表紙に書き込みがある。キリスト教とのかかわり、トルストイへの傾倒をうかがわせる書き込みである。野上が、トルストイの著書として『教訓小説集』を

読んだのは1904年（明治37）11月であるので、「小トルストイ」の自称はそれよりやや早い。

日露戦争期の日本においては、社会的閉塞感が青年たちを襲い、青年たちの煩悶をつよめたことは、いくつかの先行研究が明らかにしている。野上は、日露戦争期に20歳代の後半をむかえ、ひろく社会的関心をつよめるとともに、内面的な思考をかさねるようになった。

内面的思考の一つに、キリスト教への接近があった。1902年（明治35）2月13日、野上は松村介石の著書『総合的基督教』（警醒社書店、1899年3月16日出版）と『信仰之道』（警醒社書店、1900年9月25日三版）を購読した。竹柏園千浪生と名乗っていた時期で、『信仰之道』には、野上の「明治三十五年二月十八日見終る」の墨書のほか、「行雄」の「垂るを知りて上見ぬ柳かな 余は此歌を一読して実に感謝せり」、「紅葉」の「拝借して謹て三夜に見終る」の鉛筆書きがある。地域の青年たちとこの書を廻し読みしたことがわかる。

ついで、1902年7月11日に千浪（柴の戸千浪生）は、おなじ松村介石の『人道 基督の心改題』（警醒社書店、1900年6月2日三版）を購入した。これを読み終わって、野上は「余は松村先生著になりし総合的基督教。人道。信仰の道。の三書によりて基督教信者となりしなり。されどかくれたる信仰者たるなり。冷星記して以て柴折せん。明治三十六年六月雅号改名ス 笑楓庵冷星」と、『人道』の扉に墨書した。千浪から冷星（霊性を想起させる）への改名は、1903年（明治36）6月にキリスト教徒となったとの自覚からつけた号であったことがわかる。『人道』の裏表紙には「外様村顔戸 社会党党员」とも筆書きしてあるが、これは後筆である。

なお、北信の藤沢音吉が理想団に加入し、地域で知られるのは1902年7月以降であるから、野上のキリスト教信者となったのは、それより早い。

野上のキリスト教との出会いは、他方の社会的関心の探究と同時に進行していた。1903年（明治36）3月1日、野上は島田三郎著『世界之大問題 社会主義概評』（警醒社書店、1902年1月15日再版）を入手した。同年12月22日夜12時頃に読了、「炬燵の火まさにつきんとして寒かりし 冷星生」と同書に書き付けたが、同書にかんして、つぎのような経過があった。

此の書を明治三十六年三月一日に買ひたるも只其ままにして見のがし置きしを同年十一月二十日頃より枯川・秋水の二氏の筆になる平民新聞発起されて北澤量平氏の許にありしを借用して読み是によりて多少の社会主義の味を得て同年十二月十三日の夜読み初めたりけり。此の夜は久保田市郎、北澤□治、栗岩寿平等来遊ありて十時頃帰られしに、栗岩重三氏又来たりて十一時過ぎ迄で居りて散会するや余は日記を書き幸徳秋水著なる廿世紀の怪物帝国主義てふ本を十二時半まで読み是より此の本を読み初めしなり。臥床に付く時二時鳴るを聞く。於笑楓庵 冷星生記す。

『平民新聞』をもっていた北澤量平は、北信自由党、信陽自由党に加盟した自由民権運動経験者であり、医者であった（拙稿「信陽自由党成立に関する覚え書」『信濃』第15巻第8・9号、1963年）。冬の顔戸は、自由民権運動の時代も農閑期を利用した青年たち交流の季節であったが、1903年における野上の社会主義との出会いは、先輩や同世代の青年たちとの農閑期を利用した交流をとおしてであった。野上の『平民新聞』購読は、北澤量平所有のもの

のを見てからである（松本氏は創刊以来とする。前掲著，p.159）。以後，野上は最初は借りて読んだ『平民新聞』をみずから購読し、『社会主義』（改題した『渡米雑誌』）をはじめ、『直言』『家庭雑誌』『新紀元』『火鞭』『社会主義研究』『光』『革命評論』『世界婦人』『社会新聞』『日刊平民新聞』などを購読した（松本衛士前掲著，p.161）。

1903年に野上が読んだ島田三郎の前掲書には、「単純に社会主義を観察するに，其本領は経済上の不平均を医せんとするに在り」（p.13）、「社会主義は個人主義自由競争の弊を，協力共働組織（組織かー引用者注）によりて救済せんとして起れり」（p.14）といった部分に傍線がほどこされている。前者のくだりには「社会主義の本領即ち是なり」と野上が頭注をほどこし、「社会主義は政治的問題に非ずして経済的問題なり」と扉の余白に墨書している。

野上が幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』（警醒社書店，1901年5月10日再版発行）を買い求めたのは1902年（明治35）7月11日である。これには，「朝報社（萬朝報社のことー引用者注）記者にして非帝国主義者，社会主義者幸徳秋水先生著述 放筆一滴 帝国主義の意趣行動を解せずして何となく真正目（真面目かー引用者注）に信仰する，社会主義を夢驚する諸君，よろしく本書を讀破して看観の想を自覚せられんことを帝国主義者に切望す。明治三十六年十二月十四日天曇り小雪降り軒にしたたる玉水の音を淋しげに聞きつつ 於笑楓庵 冷星 落書きす」とある。

キリスト教と社会主義とが，この時期には野上には矛盾なくとらえられたのである。同書の序が，内村鑑三の「『帝国主義』に序す」であったことも，キリスト教と社会主義を内面的自覚と社会的問題（主として経済的問題）への関心の二面として矛盾なく野上に把握させたのであろう。野上は，1901年初めから内村の著書を読んでいた（後述）。

野上が読んだ秋水のべつの著書では，『社会主義神髓』（文武堂蔵版，博文館・東京堂，1903年11月5日六版印刷発行）が残っている。これには，「明治参拾七年参月四日着 本書ハ北澤繁次郎様ヨリ頂戴セン者ナレバ此所ニ録シテ兄ニ謝ス 笑楓庵冷星」と書き込みがある。北澤繁次郎は，野上の若き同志である北澤芳雨の父である。野上の社会主義への関心は，自由民権期を経験した世代の顔戸地域の人々との交流からも喚起された側面があったのである。

野上の堺枯川との関連にかんしては，堺枯川著『言文一致普通文』（内外出版協会・言文社，1901年10月15日第拾参版）を購読している。同書に野上は，「長野県下水内郡外様村一九六 草乃戸千浪」と裏表紙に所有者であることをしるし，おもて表紙の裏や扉の余白に「後の世の遺物となれや筆のあと」「山海のちん味ものは清水かな」「飛入りの手拭き踊かな」といった自作とおもわれる俳句を書き入れている。同書の広告欄にある堺枯川著『家庭の新風味』にも関心をもったようすがうかがえるが，この時期には堺の著書が社会主義者堺枯川の著書として読まれたふうがない。

1903年11月に北澤量平宅で『週刊平民新聞』を見て，社会主義者堺枯川を認識するようになり，のちには堺が編集出版した雑誌『社会主義研究』を購読することとなったと思われる（後述）。野上が読んだべつの堺の著書には，堺利彦著『婦人問題』（金尾文淵堂，1907年8月5日発行）がある。これには，「明治四十年九月廿七日到着 県會議員選挙之当日」「婦人問題の研究は是れ現今の急務なり」と書かれているほか，「天道主義者 恵伝園」「野上冷星蔵書」と裏表紙にある。

なお、1911年（明治44）2月19日、野上は東京神田の大塚善太郎から著書『非社会主義』（東京堂、1911年2月4日発行）の送付を受けた。それを蔵書の一冊にくわえたが、野上は「此の書は著者大塚氏より贈与せらる。余は著者の名さえ知らざりしに、何のゆかりにて恵まれしかは不可思議と云ふの外無し」と書き込んでいる。

松本氏は、1908年2月5日の『世界婦人』に野上が「社会主義を去りて基督に行きました」とする決心を投稿したことから、「社会主義運動から一步離れた位置」（松本衛士前掲著、p.167）に移ったと評価し、その具体的内容の検討をしていない。だが、おなじ『世界婦人』の文で「さりとて余は社会主義を排斥するものではありません」とのべたように、野上は「非社会主義」者になったのではなかった。おなじ投稿文の中で、安部磯雄を「日本国の社会主義者中」「余の理想に最も近い人」といい、ついで木下尚江、石川三四郎を好ましい人にあげ、みずからを「人道主義者」と定義している意味を考える必要がある。以下で、その間の野上の動向にも留意して、さらに明らかにしていくこととしたい。

二 生き方の模索

野上豊治は、1904年（明治37）に結婚したと思われる。この1904年の12月21日に彼は、富永徳麿著『小説 荒磯』（民友社、1903年4月22日発行）を購読した。これには、「此本ノ持主ハ野上冷星ナリ。野上冷星ハキリスト信者ナリ。野上豊治ハ明治卅七年モト子ヲメトル」と書き込みがある。同書には、「三十七年三十一日（十二月脱一引用者注）即ち除夜 吹雪すさびいたく寒き夜独り灯下に座して読む。多少の無聊を慰むるにたりた。冷星」と読書のさいの感慨もしるしされている。べつに野上の友人栗岩花山生の読後感「悪しき者に語りきかせよ。善き者にはささげて喜ばしめよ。廿七回より後四章読むに声打ちふるへ、涙はさながら雨のごとく下り其文をうるはず。第三の読者記」が朱書きされ、北澤芳雨生が「この小説を読む者よ。この小説の主人公すなはち弓削健雄のごとくたれ。アーメン ヨハネ記」と評している。キリスト教で結ばれた友人間で回覧したものであろう。父母に死別して、叔父・叔母のもとできびしく使われ、若くして人に心身を傷つけられそれを甘受して死去するキリスト教徒の少年弓削健雄を主人公にした小説である。この時期の野上の読んだキリスト教にもとづく小説に、中村吉蔵春雨著『無花果』（金尾文淵堂書店、1902年12月10日六版発行）もあった。

また、野上が家庭のあり方に関心をもったようすは、徳富蘇峰序文『家庭叢書 第壱号 家庭之和楽』（民友社、1901年5月15日五版印刷発行）が、1903年（明治36）3月25日に購入され竹柏園千浪の号の時期に読まれていることから指摘できる。1905年12月26日にも、野上は小林鶯里著『二十世紀家庭新説』（富田文陽堂、1905年9月20日発行）を購入している。島崎藤村の小説『家』は1911年に発表されたが、家制度と家庭のあり方は、当時すでに地域青年たちの当面する問題であった。その後も野上は、1904年（明治37）5月から1909年（明治42）7月の廃刊まで『家庭雑誌』を購読した事実が明らかにされている（松本衛士前掲著、p.161）。

野上豊治は、文学青年として、またキリスト教の仲間として、北澤芳雨や栗岩花山らとの交流をささえた時期があった。1911年（明治44）2月23日、北澤芳雨の父北澤繁次郎か

ら、死去した芳雨の愛読書であったバイロン著・木村鷹太郎訳『海賊』（尚友館書店、1905年3月11日四版発行）をもらい受けた。それには、「此の書詩歌の友なる故北澤芳雨氏の遺物なり」とあり、つぎのような「懐古」と題する記述がある。

今を去る事九年前、即ち明治参十六年六月裏白会支部を設け、専ら詩歌を研究したり。本部を東京に置き、其の幹事は石田軍次（時雨）、山本露テキ氏等にて機関雑誌うらしろを発行し会員の創作物を其紙上発表したり（但し一号以て終る）。余等の支部は久保田植湖、久保田枯柳（市郎）、栗岩花山、北澤芳雨、余の五人なり。先ず枯柳氏（二十二、三才）逝き、次に花山氏（二十五才）死す。芳雨氏（二十七才）又長逝す。残るは植湖氏と余のみ。噫々転々悲哀の感無き能はず。枯柳・花山氏妻なし。芳雨氏に至りて昨年三月妻君を迎ひ、氏の実さえ宿したりと聞く。一層同情に堪えざるなり。此の書は北澤芳雨氏の遺物として只今父繁次郎氏より特に御寄贈を辱ふしたり。唯々御芳志の程奉感謝るの外無し。記して以て彼の長逝を長く紀念せん。明治四十四年二月二十三日拜受 野上冷星 芳雨氏は千九百十一年二月十四日午前六時天父のもとに復られたり。行年二十七才

1903年（明治36）6月に、顔戸の詩歌・文学の仲間5人がキリスト教でも結ばれて文学運動をしていたことがわかる。うち三人が若くして逝去し、この集いは崩れた。先述『小説荒磯』は、若いキリスト教徒の死をテーマとしていた。それほど小説でないが、彼等が強く共鳴したのは、若くして死ぬことが身近な出来事であったことをうかがわせる。

野上の比較的若い時期の蔵書に、「信州下水内郡外様村顔戸式百四番地 栗岩源作所有」と書かれた森可次著『保命主義 人生之目的』（文学同志会、1889年1月28日再版発行）がある。友人の蔵書が野上の元にとどまったのであろうが、人生のあり方は、日清戦後から日露戦争期の若者たちに共通のテーマであったことをうかがわせる。

日露戦争期から戦後期に、青年たちが煩悶し、人生のあり方について考えたのは、近代化の矛盾がさまざまなかたちで現れていたことによるが、若くして死に直面することが多かったことも関係していよう。野上が初期社会主義に熱心に取りくむかたわら、野上が真剣に読書してつかもうとした生き方にかかわる書物群には、下記のようなものがある。とくに、①徳永規矩の遺稿は、1903年10月に長崎で43歳の生涯を終えたキリスト教徒の遺稿であり、野上の心を打つことが多かった模様が、読後感からうかがえる。⑤の書物も、野上は徳永の書の延長で理解している。④の安部磯雄著『理想の人』は、野上の必読の書となる点で注目される。また、⑨の本は、飯山町のキリスト教友の妻の死にちなんで、よく野上が本を購入した牧野書店（森山精市）から購入したものである。①と同様に、身近な若い人の死とかわっている。

① 徳永規矩遺稿『逆境の恩寵』（警醒社書店、1904年3月3日発行）

明治三十八年（1905）九月十日買求 明治三十八年九月二十九日読了 余は本書に依て大に慰藉を得たり。事業に失敗せし者、病床に呻吟する者に是非御一読を切望す。明治三十八年九月二十九日風雨荒み秋の淋しみを覚ゆる夜十時。此の夜詩歌の友なる芳雨氏、同志なる新吉氏

の来訪あり、快談時の耽る知らざりき 冷星記す。笑楓庵主野上豊治

明治四十三年（1910）一月十一日再読を初む。同年同月十四日夜九時読み終る。本書を再読するの機会ありしを喜ぶ。読み去り読み来りて万感溢れて評するの言辞を知らざるなり。同情に堪えざるところあるのみ。噫々今後は不足は云ふまいぞ。徳永氏の境遇を思えばもったいなくて云はれぬ。安眠する住家あり、寒をふせぐに衣あり、養ふに米あり。又多少読書するの余暇と余錢とあり。加ふに体身強健と云得ざるも病の為に起床に人の手を借りたる事なし。斯の如き多幸ある我！あまり幸福に過ぎて断ちて不足を思ひ悲しみ甘味を食して其の味を覚えざるに似たり。噫々我は愚なりき、噫々感謝すべきは我に降り贈えし神の恩恵なる哉。アーメン。本書を読むに我れは炬燵に入りて読み居りしを著者に対してはずかしく覚えたり。明治四十三年一月十一日夜十時記す。

- ② 黒岩周六講演、丙午出版社編輯『人生問題 全』（丙午出版社蔵版、1906年5月9日四版発行）

明治三十九年（1906）九月二十四日求 黒岩氏の学説余の思想と一致せず、第五章まで読みて断然捨るに決せり。かかる書を万卷読むとも人生問題は到底解決出来得べからざる覚知せり。されど又后日本書を繙く事あるやも計り知るべからず。兎に角一時捨置くは得策ならん。十月八日夜十一時記

- ③ サミュエル・スマイルズ著、竹村修・栗原元吉訳『職分論』（内外出版協会、1905年9月1日合本発行）

明治三十九年（1906）十月廿五日購求 野上冷星蔵書 此の書を十一月二十三日夜より読み始めたり。あまり大冊なるが故に読ぎしては他書を読む、他書を読むでは本書を繙く。かくする事幾回なるを知らず。十一章より十四章に至る四章は遂に読まざりき。后日間暇を得て再び繙く事を祈る。神よ希くは余に閑日を与よ!! 明治四十年一月六日夜読□□□記す

- ④ 安部磯雄著『理想の人』（金尾文淵堂、1906年10月5日発行）

明治三十九年（1906）十一月二十五日求 十二月二日夜十時十六夜の月明かなり。著者の理想の人即ち我が理想の人も。世のあらゆる階級の人々来りて此理想の人をよめ。

- ⑤ 原忠美著『神人合一』（警醒社書店、1906年10月10日発行）

明治三十九年（1906）十一月二十七日求 是（第十章 神人合一と患難 第二節 神は何故に患難を与へ給ふ乎一引用者注）より以下、明治四十一年二月二十九日読む。面白し。

第十章二節以下終りまで読む。喜悦の情に堪えざりき。本は徳永君逆境の恩寵と同質の者あり。明治四十一年二月二十九日夜九時記。野上冷星蔵書

- ⑥ 加藤咄堂著『増補 死生観』（井冽堂、1906年3月1日増補十五版発行）

明治四十年（1907）二月十八日求 野上冷星蔵書

- ⑦ 加藤咄堂著『冥想論』（東亜堂書店、1905年8月10日七版発行）

明治四十年（1907）九月五日求 野上冷星蔵書 分け上る麓の路はことなれどおなじ高根の月を見るかな

- ⑧ シー・エイッチ・ヘート原著、吉川潤二郎訳述『人生の行路』（内外出版協会、1907年2月20日全四冊合本発行）

明治四十年（1907）八月八日購求 野上冷星 人生の行路一噫々人生の行路は困難なる哉

- ⑨ 暁鳥敏著『求道録』（浩々洞出版部、1907年6月1日発行）

明治四十一年（1908）二月四日購求 下水内郡外様村百九十六番地 野上冷星 明治四十一年二月九日夜読了す。野上冷星蔵書

- ⑩ 医学士田村化三郎著『増補 神経の衛生』（読売新聞社、1908年4月1日五版）

明治四十一年（1908）五月一日午後二時到着 同夜九時読了 野上冷星用

- ⑪ 梁川綱島政治著『寸光録』（獅子吼書房、1908年5月25日発行）
 明治四十一年（1908）七月十五日購求 下水内郡外様村顔戸 野上豊治 野上冷星蔵書
- ⑫ 盲天外森恒太郎著『一粒米』（博文館、1908年6月13日発行）
 明治四十一年（1908）九月三日購求 長野県下水内郡外様村 野上豊治 基督信者にして。余の知友なる。飯山町の荒川正司氏。結婚して一年有半に至らざるに。妻は。生れて三十六日なる。愛児女子を遺して。哀れや彼の土の人に成られたり。遺されたる荒川氏及び子女の運命も又悲しからん。余、本日氏を訪ひ此の不幸なる出来事を聞き同情の念に堪えず涙湧出して雨の如かりき。去る八月二十七日は、彼の女史、永眠の日なれば其の紀念せんとて此の書を親友森山精市君宅に於て購求 明治四十一年九月三日 笑楓園主人
- ⑬ W. T. S. HEWETT 著、竹村修訳述『人格は如何にして養成すべきか』（内外出版協会、1907年9月18日発行）
 明治四十年（1907）11月26日求 野上冷星蔵書
- ⑭ サミュエル・スマイルス原著、竹村修訳述『品性論』（内外出版協会、1906年11月15日四版発行）
 明治四十一年（1908）十二月廿五日購求 外様村顔戸 野上冷星蔵書 スマイルス氏は余の未知の恩師なり。職分論は余を貴重な人となせり。そは人生の意義と我の職分とを自覚したればなり。此の書も又余を感化したる事大なり。再読に際し所感を誌す。千九百〇九年七月六日夜 恵伝園主人
- ⑮ 留岡幸助著『社会と人生』（警醒社書店、1910年5月16日発行）
 明治四十四年（1911）四月二十三日購求 下水内郡外様村顔戸 野上豊治 余乃財囊は富ならず。されど此の書を購はしめたる、如来の恩寵を感謝す。四月二十三日記 快樂園 野上冷星蔵書（760ページの大冊、定価2円—引用者注）
- ⑯ 新渡戸稲造序、西川光二郎著『心懐語』（警醒社書店、1910年10月15日発行）
 明治四十四年（1911）八月十二日購入 下水内郡外様村 野上冷星 明治四十五年正月七日夜七時読了 吹雪荒む。野上冷星蔵書
- ⑰ 浮田和民著『人格と品位』（広文堂書店、1911年2月1日第十五版発行）
 明治四十四年（1911）十一月十四日求 長野県下水内郡外様村顔戸 快樂園 野上豊治蔵書
- ⑱ 楚人杉村廣太郎著『七花八裂』（丙午出版社、1910年5月10日訂正六版発行）
 明治四拾五年（1912）式月式拾壱日到着 外様村顔戸 野上冷星蔵書
- ⑲ 伊藤証信著『新氣運』（丙午出版社、1912年2月26日発行）
 明治四十五年（1912）四月十六日求 野上豊治
- ⑳ サミュエル・スマイルス原著、畔上賢造訳述『自助論』（内外出版協会、1910年11月3日合本第七版発行）
 大正三年（1913）拾式月求 野上豊治蔵書

⑭で野上は、スマイルスを「余の未知の恩師」と書いている。スマイルスにたいする野上の関心は、鶴田賢次著『自助論の著者スマイルス翁の自伝』（博文館、1908年12月29日発行）を1909年（明治42）10月11日に購入、同月に読了し、1929年（昭和4）2月5日に再読していることで確認できる。

野上は、キリスト教と社会主義のあいだで生き方を模索したが、仏教にも関心をもった。文学士近角常観著『懺悔録』（森江本店・浅井文光堂、1905年6月10日発行）は、その辺の事情を考察するキーを提供する。同書の序で、「此書は昨年（明治三十七年—引用者注）夏、

信州飯山付近に於て開かれたる修養会に於て、『歎異抄』を講じたる時の問題であります。それを信友佐崎事喜君が筆記して下さったのであります」と著者が書いている。野上が1937年（昭和12）3月に回想して同書に書き込んだ文章には、「本書ハ明治三十七年ノ夏南條正行寺ニ開カレタル修養会ニ於テ講演セラレタル大意デアル。人生ト信仰ハ照里小学校ニ於ケル講演ノ筆記デ確カ明治三十九年ノ夏カト思フ。余ニ思想上ニ大革命ノ有ツタ最モ紀念スベキ年デアル」とある。日露戦後の1908年（明治41）に、野上が歎異抄や仏教に関心をもち、桑名川にいた佐崎事喜に深い敬意をいただいていたことは、読書や佐崎からののがきで明らかになるが、上記『懺悔録』の記載に野上のいう思想上の「大革命」が1906年にあったとするのは看過できない。この年6月、野上は日本社会党に入党するが、それは宗教や生き方の探究と共存していたのである。

彼の宗教的関心が「死の恐怖」にもよっていたと、野上自身が記述している。多田鼎著、清澤満之序文の『正信偈講話』（浩々洞出版部、1907年7月18日発行）を、野上は1908年2月23日に購入したが、その動機が同書の扉裏にしるされている。

三四年以前の或夜孤燈の下に瞑想に耽て居る時、我が耳本にて何者かが『君は三十才の年に必ず死ぬぞ』と宣告を与えた者があつた。其の後歳月を経るに連れて其の声もありありと聞える様になり、其の度数も頻しくなつて来た。本日余は出飯の途中如きは、前例に無き痛切に『我れは本年中に永眠すべし』と明かに胸中に其の声聞えたり。余は死を恐怖のあまり我が力の及ぶ限り諸々なる宗教書を繙き、法師や友人に其の教を授け（られ欠か一引用者注）たり。悲しむべし、更に其の効無かりき。最后余は聖人の著書なる歎異抄を拝誦して弥陀の御慈悲を伺ひ知る事を得たり。

余は元より本年中に死するか死せざるかは計り知るを得ずと雖も。此の事たるや偶然にあらざるを思ふ。噫々余は信ず。此れ寔に仏陀の『覚醒せよ』との御呼び声なる事を。余の身は本年元旦より棺の内にあるべかりしものなるを思ひば、其の日一日が儲物の如く思はれて、夕には格別仏陀の慈悲を感謝せられぬ。死の宣告は余に取りては却て幸福の種と成つたか。如来の救ひの御手の至り届せるに感謝せざるを得ぬ。記念にもかなと本日買ひ求めたり。明治四十一年二月廿三日購入 野上豊治

彼は20歳代に死への脅迫観念というべきものに襲われ、それを克服するために宗教へ近づいたというのである。すでにみた親友が若くして次々に逝去した事実が、青年の煩悶が社会的に存在した時代風潮とかさなって、彼に深刻に死の問題を考えさせたのであろう。

上記の野上による読書書物一覧の⑨『求道録』も仏教の立場からの人生論を説いたものであった。この1908年正月、野上は佐崎事喜から、伊勢の人である真岡湛海事著の小冊子『無窮堂独語』を送られた。「御氣にかなはずば御返送ありたし」と佐崎がメモを鉛筆書きして送ってきた同書を、野上は読んだ。「明治四十一年正月五日夜十一時頃、帰省せられたる親友北洲氏と共に読むで共に喜びたり。歓喜の情に堪えず。依て記す」、「本書は恩師佐崎事喜先生より恵与せられたり」と同書に読後感がある。また1908年9月28日に野上は、多田鼎著『光明の生活』（浩々洞出版部、1908年6月27日三版）を購入した。この時期に、野上は佐崎とはがきを交換しており、1910年代に交流は継続している。

また、この時期の前後に野上は、清澤満之の著書に関心をもった。清澤満之著、金尾種次郎編『懺悔録』(金尾文淵堂、1906年10月5日発行)は、1906年(明治39)10月25日に購読した。清澤満之先生絶筆『我信念』(浩々洞出版部、1907年7月16日発行)を1908年9月28日に購入し、1910年(明治43)1月10日までに4回読んでいる。「余は本日蓮華寺へ説法聞に行かんと思ひ居たりしが、家内総出にて参詣したる為め留守番をしたり。徒然のあまり本書を繙く。実に有難拝読したり。今回にて此の書を四回読む。明治四十三年一月十日記」と書き込まれている。べつに、暁烏敏代表、浩々洞編『清澤先生の信念』(無我山房、1909年6月10日第二版発行)、暁烏敏著『歎異鈔講話』(無我山房、1912年11月3日三版発行)を野上は購入し、後者の表紙裏には野上が「親鸞聖人略伝」を墨書している。

木下尚江の著『法然と親鸞』を読んだ野上が、「ぼくの云んと欲するところ説き得てめでたし」と読後感を書いたのは1911年(明治44)3月7日であった。野上の仏教への関心のたかまりには、野上に独自の動機があったが、木下尚江の仏教への関心ともほぼ並行している。野上は、尚江ほどではないが岡田式静座法に関心をもっていく。

ほかに野上は、南条文雄・前田慧雲共編『仏教聖典 全』(三省堂書店、1907年10月15日七版発行)を1908年9月15日に購入した。それには「恵伝園(エデンのその一引用者注)野上冷星蔵書」とあり、「身体を養ふに少量の糧あらば足る。神霊を養ふに聖書あれば足る。幸ひなる哉。余は凡てを有せり。噫々感謝せざらんとして不得 十月十一日夜記」としている。仏教への関心は、キリスト教徒としての野上冷星の宗教的関心の範囲内に入っていたとみることができる。野上が、宗教的資質をつよくもつタイプの個性であったことがわかる。これは、彼が精神的に悩み、不安定な資質をもっていたことからもきており、上覧読書一覧の⑩の読み方にも、それが垣間みられる。

三 内村鑑三への傾倒とその周辺

木下尚江より10歳年少である野上豊治のキリスト教との直接的出会いは、先にみたように、1902年に松村介石の著書を読んだのが動機であった。その背景には近代化で矛盾が引き起こされていた野上の内面的苦悩と地域の生活があったことは想像に難くない。野上を読んだキリスト教関係の書物には、飯山のキリスト教徒との交流から得たもの、みずから選択したとおもわれる山室軍平・内村鑑三・植村正久の著書などがあつた。

まず野上は、大挙伝道特別出版の『基督教三綱領』(警醒社書店、1901年3月1日三版)を、「明治三十七年二月八日 飯山聖公会より頂戴」した。この1904年(明治37)に野上は、山室軍平の『平民の福音』(救世軍日本々営、1901年3月29日四版)、『戦争的基督教』(救世軍日本々営、1903年6月13日発行)を読んでいる。翌05年2月11日には、さらに北米加州沿岸日本人長老教会伝道総督イー・エー・ストーヂ博士序文、稲澤謙一・平塚勇之助訳述『四福音書研究』(中庸堂書店、1904年7月9日発行)を購入した。これ以前の野上のキリスト教関係の読書には、内村鑑三の『宗教と文学』がみられるのみで、内村の著書は1905年以降に読まれるものが多い。ただし、木下尚江の『懺悔』などの読書(1907年以降)に先行している点には注目しておきたい。

野上がどのような聖書を所持していたかは不明である。彼の蔵書の中には、中村春雨編

『旧訳バイブル物語』（富山房、1903年11月2日発行）、春雨中村吉蔵著『通俗新約物語』（金尾文淵堂、1906年1月1日発行）をみることができる。前者には、「明治三十七年十二月十一日の夜十一時 木枯吹きすさび、満天黒雲現はれ、雨正に降らんとする勢ひなる夜なりき。斯様な晩は何となく哀情なきにあらず」と書き込みがあるだけである。ほかのキリスト教関係の書物に、1907年（明治40）11月20日購入の英国トーマス・アリン牧師原著、在日本アイ・ダブリュー・ケート牧師訳『萬民救済之福音』（ユニヴォルサリスト伝道局、1905年9月9日発行）と米国神学博士チェーピン師著、高橋五郎翻訳『主禱講話』（宇宙神教出版所、1894年5月20日発行）の2冊、同年12月10日購入の左近義弼著『マタイの伝へし福音書』（博文館、1907年11月30日発行）がある。

日露戦争期の非戦論でトルストイともっとも近いと平民社が評価した内村鑑三の著書で、野上が購読し、いまみることのできるものを一覧すれば、つぎのとおりである。

- ① 内村鑑三述『月曜講演改題 宗教と文学』（警醒社書店、1901年1月5日三版発行）
明治三十五年（1902）七月十四日 千浪 大胆の中には自から才為と妙法あり。只だ始めよ、其の中必ず成らん。竹柏園千浪 野上冷星蔵書
- ② 内村鑑三著『基督信徒のなぐさめ』（警醒社書店、1900年4月26日四版発行）
明治三十八年（1905）七月七日購求 笑楓庵 野上冷星蔵書 明治三十九年十二月十七日夜九時読終る
- ③ 内村鑑三著『求安録』（警醒社書店、1902年1月10日五版発行）
明治三十九年（1906）七月二日到着 七月六日読み終る。
余は此の書を以て霊のパンと為さん!? 神は余を憐み給ふて此の書を余に与へられしを感謝す。アーメン 明治四十二年十月十八日夜記。十三日の月明なり。十一時
- ④ 内村鑑三述『基督教問答 全』（聖書研究会、1905年2月17日発行）
明治三十九年（1906）八月七日求 かぎりなきいのちおもへば世中の 稀なるとしもゆめにぞありける よし之 笑楓庵 野上冷星蔵書
- ⑤ 内村鑑三著『貞操美談 路得記（るつき） 一名媳と姑の福音』（警醒社書店、1905年4月20日三版）
明治四十年（1907）十月廿一日到着 野上冷星蔵書
- ⑥ 内村鑑三著『後世への最大遺物』（警醒社書店、1903年9月10日四版）
明治四十年（1907）十月廿一日到着 十一月十四日夜 此の夜は栗岩新吉氏来訪あり、快談壯語 散会九時頃ならん。后余独り本書を繙く。精神的好食糧を得たり。冷風木の葉を吹き落とす音はらはら聞ゆ。片月いたくさえたり。時十一時 読み終る。美感交々 野上冷星蔵書
- ⑦ 内村鑑三著『よろず短信』（警醒社書店、1908年6月3日発行）
明治四十一年（1908）七月五日購求、我が親友栗岩花山氏去る五月二十四日午前十一時頃永眠せられたり。其の記念として本書を購求したり。氏行年二十五才なりき。野上冷星
- ⑧ 内村鑑三編著『櫟林集 第一輯』（聖書研究会、1909年1月25日発行）
明治四十二年（1909）二月二十日到着 下水内郡外様村 笑楓園 野上冷星蔵書
- ⑨ 内村鑑三著『歓喜と希望』（聖書研究会、1909年11月31日発行）
此の書は教友藤澤音吉氏より贈与せらる。明治四十三年（1910）九月十一日 外様村顔戸 野上冷星蔵書
- ⑩ 内村鑑三著『興国史談 全』（警醒社書店、1901年5月27日再版）

明治四十三年（1910）十一月二十三日購求 外様村顔戸 野上豊治 野上冷星蔵書

- ⑪ 内村鑑三著『独立短言』（警醒社書店，1912年7月15日発行）

大正元年（1912）八月四日到着 野上豊治 去ル明治四十五年七月三十日夜遂ニ明治天皇御崩御遊されたり。宮中ニテハ三十一日ニ踐祥式行れ、此の日ヨリ年号を大正と改まりたり。此の書は先帝崩御ノ紀念ニ購入したるなり。大正元年八月四日求 野上冷星

- ⑫ 内村鑑三著『伝道之精神』（警醒社書店，1912年4月25日三版）

大正元年九月七日求 野上冷星蔵書

- ⑬ 内村鑑三著『信仰日記 附歌ころ』（岩波書店，1919年12月8日発行）

大正八年（1919）十二月二十七日求之 号冷星野上豊治 余ハ今ヨリ十年前迄ハ内村氏ヲ崇拜スルモノノ一人ナリキ。否寧信者ナリキ。今猶先生ヲ尊敬ス。サレド今ハ何物ヲモ求ズ。ソワ他ノ美味キ物ニ我が腹満チタレバナリ。大正八年十二月二十七日記ス。

- ⑭ 内村鑑三著『苦痛の福音』（警醒社書店，1924年8月15日三版）

大正十四年（1925）二月六日到着 長野県下水内郡外様村顔戸 冷星野上豊治

ほかに、購入年月は明らかでないが、内村鑑三述の小冊子『角笈パムフレット 第九 基督教と社会主義』（聖書研究会，1907年2月16日発行）が野上の蔵書中にある。日露戦争期に野上は、内村を崇拜し、「内村信者」でさえあったと、1919年に回顧している（書物⑬への書き込み）。内村への野上の関心は1920年代につづいているが、「他ノ美味キ物」のほうに関心が強まっていった。なお、⑪の書き込みに野上の明治天皇観がうかがえる。

野上は、植村正久著『靈性之危機』（警醒社書店，1901年10月21日発行）を、日露戦争終結の翌1906年（明治39）1月9日に購入した。しかし、「此の購求せし時、百六十頁まで読みし興味すくなく、其のまま放捨し終りぬ。此の夜吹雪すさみ友人来らず無聊のあまり人生の無常を觀ず。何となく本書を繙く。感興多し。以前読みし時とは全く其の趣味相違せり。是れ其の境遇に依るならん。明治四十年二月十五日夜十一時記。可憐なる信徒 野上冷星」と書き込みをしている。植村の著書に当初違和感をもった点に注目したい。その『靈性之危機』を再読して「感興多し」と書いた直前の1907年（明治40）2月1日に、野上は海老名弾正著『靈海新潮』（金尾文淵堂，1906年11月25日発行）を購求した。その箱には、「悲哀 道同じからざれば共に語らず。骨肉離散すとも友は売るに忍びず。惨風悲雨吾等が迎る荆棘の路多少の寂寥なきに非ず。悲哀なきに非ず。而も慣れては寂寥を寂しみ悲哀を悲しむ。茲に至りては涙も酒の味なり。四十年五月卅日 光より拔書」と墨書している。植村や海老名にたいして野上は、違和感をもったようすがうかがえる。

野上が、キリスト者としての内村よりも「美味キ物」と考えたのは何か。私は、安部磯雄、木下尚江、石川三四郎やトルストイへの関心を高めていったと考えている。それは、社会主義とのかかわりの濃淡とともに、体制への批判の有無とが関係していたと考えられる。

四 初期社会主義者たちとの交流

野上豊治が交流をもった初期社会主義者たちは、見ることできた野上宛のはがきから、あるていど復元できる。

1. 東京との交流

まず、東京の雑誌出版とかかわるものに、1906年（明治39）8月19日に堺利彦から受け取ったはがきがある。『社会主義研究』は、堺利彦の編集により1906年3月15日（第1号）、4月15日（第2号）、5月15日（第3号）、7月1日（第4号）、8月1日（第5号）の5号が、由分社から発行された。各号15銭で、「本誌の編輯者堺利彦の基本的立場は、素朴なものにしてマルクス主義であった」（塩田庄兵衛「解説」p. VII, 労働運動史研究会編『明治社会主義史料集 補遺(1)』明治文献資料刊行会、1963年）。野上はこれを予約購読したのである。

長野県下水内郡外様村 野上冷星様 堺利彦

突然ながら社会主義研究は経済上維持すべからざる運命に立至り第五号にて廃刊致します、就ては貴下の前金十五銭だけ過剰になりますがそれに対し別封にて小冊子数部差出します、押つけがましく甚だ失礼ながら悪しからず御宥恕を願います 匆々

ついで、1907年2月8日京橋の郵便局の消印のある日本社会党本部からのガリ版刷りはがきがある。野上は、日本社会党に1906年6月13日に入党状を送り、6月29日に本部から入党承諾状を受け、7月15日に党費6か月分を送った。下のはがきは、議会政策派と直接行動論が対立する第二回大会の案内状で、野上は欠席し、その動向を見守っていた（松本衛士前掲著、p.166）。

信州下水内郡外様村一九六 野上豊治様

拝啓 本月十七日正午より東京神田錦町錦輝館に於て本党大会を開き左の事項を決議致候間御繰合せ御出席相成度候

- 一、党則修正ノ件
 - 一、役員改選
 - 一、万国大会に關スル件
 - 一、宣言及決議
- 右終て懇親会を開く

明治四十年二月 日本社会党本部

この大会以降、長野県下の初期社会主義者のなかに内部対立がもちこまれることになり、同時に、官憲の弾圧がきびしくなっていく。それは、『社会新聞』の遊説にかかわる上田町からの1908年（明治41）8月9日付けの鈴木楯夫からのはがきが物語っている。

県下水内郡外様村 野上冷星様 東京神田区社会新聞社

炎暑の候益々御清栄の段奉賀候 今回地方同志読者諸兄を訪問し御意見を叩き且つ状況を視察せんと絵葉書行商人となりて去一日東京を出発し六日当地に來りし所政府よりの命令とかにて当警察の干涉甚しく到底予定の旅行為し能はざる故本日帰郷の途に就き申候 付ては親しく拝眉に接し得ざるを遺憾として此処に御挨拶申上候 何卒主義の為め御奮闘被下度候 頓首

明治四十一年八月九日 上田町にて 片山潜方 鈴木楯夫

『社会新聞』は、1908年（明治41）6月15日（第45号）のあと、弾圧にさらされ、8月15日の第46号をガリ版印刷でださざるをえなかった。その記事「迫害愈来る！」（『第7集』p.361）のなかに、「前日我社の鈴木君ハ信州地方に絵ハガキの行商に行くや警察は干涉妨害之をなさしめず空しく帰京するに至れり」とある。また、同誌の「我党の運動 鈴木楯夫」（同前、p.367）には、「予は今回絵葉書行商人となり、果して政府当局者の云ふが如く今日の国民が安寧あり秩序ある生活を為し善良なる政治に瑞嚳（随喜か、引用者注）の涙を流し泰平を謳歌し居るかを視察せんと、本月一日東京を出発し埼玉・群馬両県を経て六日に長野県上田町に入りしに二日附政府よりの電令ありし由にて警察の干涉甚しく身辺常に数名の巡查を附して警戒を加へ、訪い来る同志及我読者を一々手帳に記して威嚇し甚しきは警察署に引致して数時間取調を為し予と談話せしめざるなどの非立憲の蛮行を取てなし警察権を極度に濫用し干涉迫害の状、真に言語に絶す、事態如此にして到底旅行を継続する能はず、止むを得ず一先十一日帰京せり、然れども此十日間の旅行に依りて視察したる所は即ち、政府が旅行を妨害する所以を明かに語れり」とある。鈴木野上宛はがきは、それを傍証するデータである。

鈴木楯夫遊説にともなう弾圧事件は、野上にも影響するところが大きかったと推定される。

越えて1909年（明治42）4月28日付けで片山潜から野上宛の、『社会新聞』にかんする紙代請求のはがきがある。これは、『週刊社会新聞』の紙代の滞納がみられたようすをうかがわせる。野上のキリスト教への傾倒がすすみ、『社会新聞』への関心の低下をうかがわせる。

長野県下水内郡外様村 野上冷星様

拜啓 貴下益御社栄の条奉賀候 扱毎々御配慮を蒙り存続致来り候社会新聞も在京同志先輩諸氏の賛同に依り今后一層拡張専ら主義の為に貢献致度候条誠に恐縮の至りに候へども此際新聞代御送金賜らんことを偏に奉希望候 追々来月よりはマルクスの資本論及其注解を掲載致候 早々敬具

四月廿八日

東京府田端六一三

片山 潜

2. 県内の交流に活路を求めて

野上のもとに平民文庫が7冊残されている。その一冊である小冊子の安部磯雄著『地上之理想国 瑞西』（平民社、1905年2月20日再版印刷発行）の裏表紙には、「明治四十二年一月八日記 明治三十八年中平井氏と社会主義伝導の為め行商せし時の残物にして当時を回想する紀念品なり。野上冷星蔵書」とある。1909年に、野上が顔戸の同志たちと社会主義のために尽力した時期を「紀念」と回想する心境になっていたことをしめしている。この背景には、何があったのであろうか。

1905年3月、野上らは顔戸平民倶楽部を結成し、日露戦争への批判を強めた。顔戸平民倶楽部は顔戸社会主義研究会でもあった。3月には飯山町の牧野書店から平民文庫を借り受け、社会主義伝導行商をおこなった。平井俵太、北澤芳雨、栗山花山らと顔戸の小学校同窓会、大田村（飯山市）、岡山村上境・下境（飯山市一山）、岡山村桑名川（飯山市照岡）、柳原村小佐原（飯山市小佐原）、高野村関沢・犬飼（飯山市瑞穂）、中村・渋方面、さらに富倉（飯山市富倉）に行商したようすの一端は、松本氏が明らかにしている（松本衛士前掲著、

p.158)。

この伝道行商のときの一冊が安部の『瑞西』である。ほかに「紀念」として1909年に残すことにきめた書物には、西川光次郎著『カールマルクス』(中庸堂書店, 1902年4月10日発行), 西川光次郎著『土地国有論』(平民社, 1904年9月10日発行), 幸徳伝次郎著『ラサール』(平民社, 1904年9月1日発行), 西川光次郎著『富の圧制』(平民社, 1905年1月33日再版発行), 石川三四郎著『消費組合(一名購買組合)之話』(平民社, 1905年3月1日三版印刷発行), 平民社同人編『革命婦人』(平民社, 1905年5月14日発行)がある。西川の『カールマルクス』を除き平民文庫で、すべてが文庫本スタイルの小冊子であった。

ついで、1907年(明治40), 08年(明治41)に野上豊治は、半田一郎, 新村忠雄(秋峯), 岡里定一, 小池青陽, 丸茂天靈らと書簡を通じた交流をしている(松本衛士前掲著, p.163)。その一端は、野上が受信し現存するはがきからわかる。

まず、半田一郎(1877~1847)のはがきには、下記の二葉がある。①は1906年9月16日付け, ②は同年10月25日付けのもの。半田は小県郡傍陽村を中心とし、東京との交流も頻繁に初期社会主義の運動を展開していた。この半田と野上とのかかわりは、べつの論稿で考察することにするが、ここでは、新村忠雄宅でひらかれた長野県下の初期社会主義の同志懇話会と半田が東京控訴院の被告席にたたされた東京の電車事件をめぐる野上と交渉のあったことにふれておくこととする。なお、半田一郎にかんする先行研究には、松本衛士前掲著の「半田一郎の活動と社会主義者の遊説」があり、参考になる。

①下水内郡外様村 野上豊次様 小県郡傍陽村 半田一郎拝 9. 16

来る廿二日后一時よりや代町新村忠雄君方に県下同志の懇話会を開き続けて観月とシャレるとの事御出席を願ひます

次に控訴院が明后十八日より始まるとの知らせがありまして明日上京致しますがよろしく願ひます

社会新聞の拡張何分願ひます 東京ハ三崎町にて后便ヲ申上ます 半田一郎拝

②長野県下水内郡外様村 野上豊治様 神田区三崎町三ノ一 社会新聞編集部内 半田一郎拝 10. 25

天高く馬肥るの候実に燈親むべきと相成ました 浮世ハ依然南宮高く労働者廃るの悲惨ハ日々益々甚しくそれだけ我主義の主張の必要に感ぜられます 何卒御奮闘を願ひます, 次に小生発信の回章今日拝受 愚生に多大の御同情下され難有存ます 一景とハ生の愚にもつかぬ号です 裁判終決次第帰郷是非御伺御高見を承り度存ます
祈御健康

半田の①のはがきの内容, 1907年9月の「二十二日后一時よりや代町新村忠雄君方に県下同志の懇話会を開き」とある文面と関連した新村忠雄(1887~1911)からのはがきがある。

下水内郡外様村 野上冷星君 千曲之河畔にて 新村秋峯 二十日の夜

御手紙拝見せり 是非御出で下さい 弁当は御持参なく 尚僕のところで一泊の予定で

ねい 僕の宅へは午前中に着の事たのみますよ

半田からの連絡とべつに、野上は新村と直接交信して新村宅の会合と観月会に臨んだとおもわれる。新村のはがきの文面には、新村が8歳年下にもかかわらず、年長者のような親しみのこもった呼びかけがみられる。

つぎに、南安曇郡明盛村で蚕種製造をしていた岡里定一のはがきをみよう。これには、①1907年（明治40）7月2日投函、7月4日配達のもの、②8月24日投函、8月26日配達のものがある。岡里は、1907年に長野県下の初期社会主義者を結集する同志交信会を30人ほどで組織しており、『週刊社会新聞』（第22号、1907年10月27日、「同志の活動」）に報じられていた。

①下水内郡外様村 野上豊治殿 南安曇郡明盛村 岡里定一 七月二日
社会新聞早速御惠贈下サレ正ニ拝読 兄ノ厚意ヲ感謝候 茲ニ益々奮闘以テ主義ノ貫徹ヲ計ル 兄時下折角自愛健在ナレヤ 交信会ノ回章兄ヨリ御発送ヲ願度候

②下水内郡外様村 野上豊治殿
小生目下秋蚕種界ニアリ奮闘中ニ有之候 彼ノ誇大ノ廣告ト甘言ヲ以テ純良ナル育蚕家ヲシテ失敗ニ帰セシムル悪漢奸商当地ニ続出ス 余輩ハ微力ト雖モカカル鼠輩ヲ撲滅セシメズシテアランヤ 且ツ横暴ナル地主ニ信賴ナル小作人弱者ノ為メニハ務メテ蚕業ノ経営ヲ唱導シ優良蚕種ヲ供給ス 兄小生ノ微志ヲ察シ努力ヲ乞フ

南安曇郡明盛村 岡里定一

桃李之節を過ぎ去りて青葉繁れる候と相成申候 兄益々奮勉之段奉賀候 此頃は御書状ニ預リ奉謝候 小生も幸い健在にて目下秋原蚕之飼育及ビ農事之仕付方にて多忙を極め候 今回機関紙社会新報なる者発行之趣き右ハ何故ニテ発行候や 兄等之経営ニナルモノカ詳細之御通知と該紙一葉御送付を願上候 交信会も益々発達ナサシムベクこと候へ共茲二三ヶ月は多忙之為め意の如くなり申さず候 微力之小生聊か社会ニ貢献なすべく候 若し貴地に於て秋蚕種之入用者あらむ御申込を願ふ 弱者之為業盛す

岡里のはがき①は、野上からの『社会新聞』の送付にたいする礼と岡里が主催する同志交信会の回章を関係者へ発送してほしいとする野上への依頼がおもな内容である。②は蚕種製造者としての岡里の意図と宣伝が主であるが、野上が機関紙『社会新報』を発行したのかの問いあわせが注目される。

また、諏訪郡境村で喚醒会を組織していた小池伊一郎青陽の野上宛はがきが二葉のこっている。①は1907年（明治40）6月1日付けで、野上が日本社会党の禁止解党後に長野県内の初期社会主義者と交流を積極的に望んでいた時期にあたり、②は08年（明治41）3月2日付けの、野上がキリスト教への傾斜を強めた時期のものである。

①長野県下水内郡外様村 野上豊治君 諏訪郡上スワ町入山方 小池青陽 六月一日
咄失敬 生が敬慕措く能はざる同志野山冷星君生兄と未だ一面の識なくて我信賴せし交

信会発起者岡里秀嶺兄によりて同主義之人たるを知り深く慕ふてやまざる所 宜しく社会の不平に向つて益々奮闘せられんを 生は朝夕社会の不平等に憤り身之不遇を嘆きつつ今は冷酷残忍なる資本家富豪の奴隷に呻吟 アア平民労働階級や悲惨ならずや 平民新聞横暴なる政府の手に発行停止せられてより暗夜の光明を失ひたる感がせられた昨今世界婦人に接し君の投書之見られ欣喜雀躍 生も日夜伝道 今は主義の同志交信会員十余名を得た アア快ならずや 余は後便

②信濃下水内郡外様村 野上豊治兄 足下 諏方郡境村喚醒会員 青陽生 三月二日夕暮はしの同志冷星兄爾後の無音は寛恕せよ、時下暖気日に増し郊外の散策主義の伝道亦快絶ならんと青陽頗る楽しみ居る所兄や如何奮闘せらるるや、是より、吾等平民貧者労働者の天地にはあらざるや、我が交信会は奈何なられしものや秀嶺兄の因循主義の為め不忠実なる亦驚かざるを得ずだ、微力なる小生等の喚醒会は愈々活動の期に到る警察の干渉亦甚だしくて予は寧ろ滑稽に堪へない、何処も同じ主義者に対する警察の御心痛誠に感謝に禁えず。兄は断然社会主義を去り、キリストに走りし様、世界婦人紙上にて承る、「信仰なき主義」云々とキリスト教を多く知らざる予の了解に苦しむ所。予は断乎として直接行動を執る無政府党に与す、然し議会政策を捨てるものにもあらず、キリスト教を避けるものにもあらず、キリスト教の教へは予も傾聴信ずる所、然れども偽善社会、黄金社会に何の効かあらむ、キリスト教を以て社会改革は至難のことと思す、之れ一つの迷心、アキラメ主義ならん、社会革命は宜しく直接行動によらずして何ぞ、予は秋水大兄と共に無政府主義者也、予は先輩同志の運動の二派に分かれたるを悲しむ、是れ趨勢の然らしむとは云へ実に慨嘆に禁へず、軟派の社会主義研究会にては片山兄除名云々にて紛擾を来たし、機関紙は休刊とや残念至極。金曜講演会の諸兄の犠牲はただ血涙のみ、予は暴悪政府の処置飽くまでも悪みて止まず、血の沸いて肉の躍るを覚ゆ、アア压制政府、予は極力主義の為め呪はざるを得ず、兄や如何」野上兄、不肖予に教訓垂れよ、鶴首待ち居る所、(兄の健全を祈る)兄失礼の言は乞ふ許せ

小池のはがき②は、野上豊治が『世界婦人』の1908年(明治41)2月5日号に投稿し、社会主義を「去り」キリスト教へ「走りし」ことを明らかにした時期をとらえている。小池のはがき①で期待した岡里の交信会が、議会政策派と直接行動派の対立のなかで機能しなくなり、小池の直接行動論・無政府主義の立場からは岡里は「因循主義」におちいっていると見えた。野上のキリスト教にも小池は「偽善社会・黄金社会に何の効かあらむ」と疑問を投げかけ、野上に無政府主義を理解するよう呼びかけている。これは、野上の受け入れるところとはならなかった。

なお、1908年元旦に長野市南県町戌一の丸茂天霊からの年賀の挨拶状が、「恭賀新年 四十一年元旦 御来長乃節は御立寄被下度候、新しき交誼を乞ふ」の文面で野上に届いている。

これらの野上宛はがきは、断片的ながら、顔戸平民倶楽部の運動が同志の死去もあって解体したあと、野上が県内の同志との交流に活路を見いだそうとし、県下の同志とのあらたなネットワーク(新たな交誼)をさぐるうとした状況をうかがわせる。交信会はそのひとつのよりどころであり、野上は新村忠雄宅の会合にも参加をいとわなかった。しかし、初期社会

主義者の分裂が深まる一方、官憲の弾圧がいつそうきびしくなり、彼の県内を視野に入れたあらたな社会的活動の道をひらくことはできなかった。そのなかで野上は、人道主義者として、安部磯雄、木下尚江、石川三四郎の生き方にそう方向をえらんだのであった。

おわりに

野上豊治が、1908年（明治41）2月に『世界婦人』へ「余は社会主義者たらんかキリスト者たらんかとの問題に付ては久しく煩悶して居ましたが、トヲトヲ社会主義を去りて基督に行きました」と冒頭にうたった文を投稿した時期は、彼のトルストイへの傾倒はどのようになつていたのであろうか。

彼は、1908年1月13日からトルストイ著『人道主義』を読んだ。これは、明らかに上記の投稿末尾の「余の主義は人道主義とでも云ふのが一番的て居るでせふ」のくだりに反映している。同年4月に野上が『トルストイ之人生観』を購読したさいには、「余はトルストイ教の一信者」とみずからを規定した。彼のトルストイの著書の既読書を整理一覧し、さらにあらたなトルストイの著書を読む決意をのべている。以後のトルストイにかんする彼の読書は、本稿その1で一覧したとおりである。1911年1月に購読した『小説アンナカレンナ』には、トルストイを「恩師」「我が再生の父」と書き込んでいる。

野上のトルストイへの傾倒はその後むしろ強まった。1920年（大正9）1月31日、野上は「世界大戦平和記念」にトルストイ著、加藤一夫訳『我等何を為すべき乎』（洛陽堂、1919年9月5日五版発行）を購読している。それには、「レヲ、トルストイ翁八十二才ノ誕生日ノ教訓」を書き付け、「十六章ニハ自ラノ労働ニ依リテ得タル物ヲノミ与ヘテ初メテ善ナル事力説シタリ」の一文だけを特記した。農民としての労働の自覚がうかがえる。さらに同書には、つぎのように書かれている。

近時我国デモトルストイノ研究日ヲ追テ盛ナリ。其ノ研究ノ為ニ専門雑誌ノ発行サヘ有リ。シタガツテ伯ノ訳書甚ダ多シ。余ノ有スルモノノミニテモ左記ノ如シ。

復活二冊 生ヒ立チノ記二冊 我宗教 我懺悔 イワンの馬鹿 教訓小説集 下僕ノ生涯 人道主義 長恨 男女観 人生ノ意義 人生観 家庭ノ幸福 アンナカレンナ 隠遁 闇ノ力 偉人トルストイ トルストイ言行録 以上二十一冊

一方、野上が尊敬した木下尚江のトルストイ観は、1908年12月の「矛盾の人」、1910年11月の「トルストイ観」が、本稿その1で考察した以後のものである（『木下尚江全集 第一八巻 論説・感想集7』教文館、1999年）。二つの文で尚江は、愛読した杜翁の著書は、『吾が宗教』『神の王国』『何を成すべきや』『芸術とは何ぞや』など、とくに『マイ、レリジョン』（吾が宗教）で、小説は二、三を瞥見しただけとしている。尚江はトルストイを知るためだけでなく、自分の抱えていた疑問を解決するために杜翁の著書を読んだという。トルストイから、「権力の否定」にこそ「基督の使徒」の本領があることを学ぶとともに、「農民はト翁よりも遙に偉大」であり「真個の生活者」であることを教えられたとする。また、ト翁を「遊民」であるために「多舌」となって、「世間・智者階級の人士」「世人」にたいし、「遊

民を以て自ら尊貴なりとなす誤解迷信」を悟らせ、その「驕慢無智」を悔い改めさせようと奮闘する「矛盾の人」「煩悶の子」と位置づけている。さらに尚江は、杜翁が神経質であり、「悪に敵する勿れ」を知りながら「悪を憎む人たるを免れず」家出事件を起こしたところに「葛藤の最後」をみた。人間トルストイの自己と社会の矛盾への飽くなき挑戦こそが「翁の真生命」であり、「二十世紀に一大波瀾を巻起さん」とする偉大さであると、尚江はみただであった。

農民キリスト教徒としての野上のそれは、木下尚江のトルストイ観とおのずと異なった。キリスト者と宣言して以降、野上は生活の場を「恵伝園」(エデンの園)、「快楽園」とし、従来の暗いイメージの自己評価を変えようとしている。これは彼が、社会的矛盾をみない方向を辿ったからではないと、私は考える。べつに考察をくわえる機会をえたいが、1910年代から20年代の日本社会やロシア革命など世界の情勢に、野上が目配りつつけているからである。

野上は、1916年(大正5)12月に楚人冠杉村廣太郎著『弱者の為に』(至誠堂書店、1916年11月15日三版)を、1917年(大正6)3月に柯公大庭景秋著『世界を家として』(至誠堂書店、1917年2月10日発行)を購読し、日本社会の抱える矛盾やトルストイの祖国ロシア、ソ連のゆくえに関心をはらった。1921年(大正10)4月には、長女梅子の婚礼の日を記念して、大阪朝日新聞記者中平亮著『赤色露国の一年』(朝日新聞社、1921年1月27日再版)をもとめた。大庭の著書には、その後の大庭の動向に気を配っていたようすで、「大正十三年本著者露国ニ再遊シ、不幸にして労農官憲の為に銃殺セラレタリト云う」と後筆している。

越えて、野上は1930年(昭和5)3月18日に安部磯雄著『国民の審判に訴ふ』(先進社、1930年1月15日発行)を購入、4月2日に読了、「大ニ共鳴スル所」を感じた。同書には、さらに二つの文を書き込んでいる。一つは、「著者ハ去ル二月二十日衆議員(院か一引用者注)ノ改撰ニ際シ、彼独特ノ政策ヲ掲テ東京第二区ヨリ立候補セシモ、資本家党ノ為メニモロクモ敗惨ノウキ目ヲ見タリ。余ハ先生ノ落撰ノ報ニ接セン時、如何ニ残念ニ思ヒシカ!」。もう一つは、「私ハ明治三十九年か四十年ニ同志ニ依リテ日本社会民主党(日本社会党か一引用者注)ノ組織セラルルヤ入党セシニ、当時其ノ機関新聞タリシ平民新聞ニ同日ノ入党者トシテ安部先生外二、三氏ノ氏名ト共ニ列記報導サレシヲ、忘ルル事ノ出来ヌ余ガ思ヒ出ノ一デアル。省レバ古ルキ我レナル哉」という回想であった。

1930年に50歳代に入っていた野上豊治は、キリスト教と社会主義の関係を、若いころと違った視点ではあるが、農民の立場から問いつづける存在であった。

なお安部磯雄は、野上の愛読書、1906年出版の『理想の人』で、トルストイを「現代の大人物として認められて居る」(p.26)と評価し、「偉大なる人物の為に催眠術にかかって居る」人が多いが、それを梃子にそれぞれの「精神修養上一大活動力」にすることの大切さを指摘した(p.61)。安部は、「二十六歳の時から始めてトルストイの書を読み始めた。余が読んだのは彼の小説ではなくて、『我宗教』『我懺悔』『神の国は爾曹の中にあり』などいふ宗教的著書であつた。今日は余り多く彼の書を読むことはないが、余が修養の為にトルストイが大なる光明を与へて呉れたことは決して拒むことが出来ない」(p.52)とトルストイとの関係をしるしている(註3)。

ア・イ・シフマンは前掲『トルストイと日本』の中で、日露戦争最中の1904年9月4日付

けで、『平民新聞』代表安部磯雄がトルストイ宛にだした手紙の全文をしめし、同年10月5日にトルストイが安部に書き送った手紙を紹介している。トルストイが返信で、日本の平民社に集う初期社会主義者たちの戦争反対の活動に賛辞を呈しながら、日本の社会主義者たちの共通の世界観とは一致しないトルストイの宗教的・道徳的教義の論証に紙面をついやしたことを明らかにしている。しかし同時に、「この手紙は、トルストイが彼と交際を結ぼうとする日本の社会主義者たちの希望に応じたこと、見解の相違にも拘らず、彼らの新聞紙上を通じて日本の世論に訴え、戦争を批判し戦争の早期終結を呼びかけようとしたことなどを、実証する価値ある歴史的文献である」(p.111)と評価した。

野上豊治が、このとき奥信濃の若い農民として、トルストイと安部・木下たちが日露戦争反対のために交流した歴史的経験に、事実上参加し、それを「忘ルル事ノ出来ヌ余ガ思ヒ出ノ一」とする生涯を送ったことは紛れもないように、私には思われる(註4)。

(1999年10月31日稿了)

註

- 註1. 小西増太郎にかんする研究には、杉井六郎「小西増太郎覚書」(同氏著『明治期キリスト教の研究』同朋社出版、1984年所収)がある。小西の自叙伝『トルストイを語る』の記憶違いをただし、トルストイとの深い交わりののち、小西がロシア語の能力、ロシア通の立場から参謀本部の雇となり、日露戦争期に、トルストイ主義に基づく反戦・非戦のジャーナリズムに彼の姿を見ることのできない背景について明らかにしている。また、杉井氏は、『明治期キリスト教の研究』に納めた「反戦思想とトルストイヤン」で、幸徳秋水、平民社の反戦論、鹿児島生まれのトルストイヤン白石喜之助、安部磯雄、潜在化したトルストイヤンなどを検討している。
- 註2. 長野県下水内郡外様村顔戸(現飯山市)における野上豊治らより以前の俳諧の歴史については、足立幸太郎『平井三斧翁 附『夏野集』』(私家版、1938年)がある。
- 註3. 安部磯雄については、荻野富士夫『初期社会主義思想論』(不二出版、1993年)所収の「1910年代の安部磯雄」がある。
- 註4. 私の野上豊治に関する研究は、地域における初期社会主義の理論と運動の解明とともに、初期社会主義と農村・農民との関連を解明する問題意識によるものである。後者に絞った課題は、続稿でさらに検討したい。